



TITLE:

<Book Review>H. L. Shorto, A  
Dictionary of Modern Spoken Mon.  
Oxford Univ, Press, London,  
1962,xvi+280p

AUTHOR(S):

三谷, 恭之

---

CITATION:

三谷, 恭之. <Book Review>H. L. Shorto, A Dictionary of Modern Spoken Mon. Oxford Univ, Press, London, 1962,xvi+280p. 東南アジア研究 1965, 3(3): 205-206

ISSUE DATE:

1965-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55099>

RIGHT:

葉とは多少なりともちがっているということである。

(桂 満希郎)

Herbert C. Purnell: *A Short Northern Thai-English Dictionary (Tai Yuan)*. Overseas Missionary Fellowship, Chiang-mai. 1963. vi+125 p.

本書は先に述べた *Colorful Colloquial* と対を成すもので、タイ語北部方言の小型辞書である。あつかわれている方言は、やはりメーチャン (Mae chan) 地区のそれである。語彙の数は、ざっと計算して、1900 余りである。著者が1962年から1963年にかけて現地で集めたもので、単語の数そのものは余り多くないにもかかわらず、熟語の類がかなり多く取り入れられているのは便利である。大体に、このような方言を習得する場合、本当に困難なのは音素、声調、語彙などのちがいがいよりも、むしろいろいろなイディオマティックな表現を身につけることだと思う。そういった意味で、巻末につけられた *Restricted Intensifiers* の項は非常に有益である。

バンコクのタイ語は全国の小学校で教えられており、かなりすみずみまで行きわたっているとはいえ、街から離れた村落や山地民の村などで仕事をする場合には、やはりその土地の方言でなければ仕事を進めることができない。こういった点を考えると、本書と先に述べた *Colorful Colloquial* を並用すれば、非常に効率よくこの方言を習得することができるであろう。

本文の前に、この方言の音素体系と表記法とを、チェンマイ方言および標準タイ語と対比しながら説明している。標準タイ語には5つ、チェンマイ方言には6つ、チェンライ方言には7つの声調を設定する。しかし、著者のいう High Long Fall, High Short Fall (音節末尾に閉鎖音を有する), High Short Fall (音節末尾に閉鎖音以外の子音を有する) は、相補的分布を成すから、これらをひとつにまとめて、全体としては、6つの声調を有すると解した方がより簡単に説明できるのではないかと思う。

語彙の数もまだ充分ではなく、意味にかんする説明にもややあいまいな点や取りちがえているのではないと思われる点もあるけれども、とにかくこの方言を習う際には、本書を手掛りとするのが一番よいであろう。

(桂 満希郎)

H. L. Shorto: *A Dictionary of Modern Spoken Mon*. Oxford Univ. Press, London, 1962. xvi+280 p.

われわれがその実態を十分に知ることができないような小言語についての辞書とか文法書などは、それが多少不正確なものであっても、少なくともそれ以外に利用しうるものがないという消極的な意味ではやはりそれなりの価値をもっているものである。モン語については R. Halliday: *A Mon-English Dictionary*. Bangkok, 1922. がその例であった。しかしその不完全さは別としても、この辞書は文語のそれであって、これによって現代モン語口語を知ることはいないのである。というのは、モン語では単に口語と文語の間に著しい隔たりがあるばかりでなく、文語の綴字と口語の音素形式を対応づける一定の規則すらないからである。ここにあげる Shorto 氏の辞書はまずこの点をはっきりさせて、本文をもっぱら口語の辞書とし、付録として個々の単語の綴字と音素形式との対応表を掲げている。このようにモン語の口語と文語とをはっきり区別したのは Shorto 氏が最初だと思う。

口語の辞書、とくに小言語の場合のように実用的な目的よりもむしろ言語学の専門的な目的をもった辞書においては、何よりもまず表記法の正確さが大切である。むろん完全な音素表記にこだわる必要はないわけだが、少なくともその言語の音素体系をよく反映するものでなくてはならない。本書は IPA の記号を使って、著者もことわっているように必ずしも音素表記ではないけれどもむしろそれよりも詳しい程度の音声表記がしてあるから、この点、安心して使える辞書である。著者はロンドン大学 SOAS の Lecturer であるが、ロンドン学派の音声学的技術の強さにあらためて感心させられる。

さて、本書は、まず 1949-50 にロンドンで調査したものを1950-1, 1956-7の2回にわたるビルマでの現地調査で補充・再検討した結果にもとずいていて、標準的なビルマ・モン語であるサルウィン東岸の方言を対象としている。見出し語の数は約5,000で決して多くはないけれども、その内容は実に豊富で、品詞別・意味の説明・例文・熟語とその例文・派生語と同義語など関連語彙・綴字・派生語や借用語についてその由来等々がいちいち掲げられている。相当長期間にわたる

調査研究の蓄積があるとはいえ、これだけのものを作った Shorto 氏の語学力と綿密さにはこれまた驚嘆するのである。

もちろん細かい点では疑問と感ずるところがないわけではない。たとえば派生関係の説明にしても、*palot* (文語 *kamlat*) 《thief》を labial form of *klot* (文語 *klat*) 《to steal》とするように文語の綴字にかかわらず口語形式どうしの関係として説明しているのだが、何か共時態と通時態がごっちゃになっているような気がする。著者は本書を、その冒頭で、現代ビルマ・モン語の「記述」の一部とよんでいるけれども、上のような点も含めて全体に、たとえば、Haas: *Thai English Student's Dictionary* (1964) に見るような記述言語学的なまとまりはない。

ともあれ、これが本書の著者をはじめロンドンの学者たちの東南アジア語研究の水準を示すものとすれば、続刊を予定されているらしいモン語の文法書もさることながら、パラウン語・ワ語などすでに現地調査した諸言語についてのくわしい報告をも是非とも期待したいものである。(三谷恭之)

Tatuo Kira & Tadao Umesao (eds.):  
*Nature and Life in Southeast Asia IV.*  
Fauna & Flora Research Society, Kyoto,  
1965. Vii + 402 P.

大阪市立大を中心とする東南アジア、主としてタイ・マレーの調査報告の第4巻である。前回に引きつづき、自然科学と人文科学の両面における多彩な研究結果が発表されていて、日本の学界の東南アジア研究も、いよいよ軌道にのってきたという感じが深い。標題を追ってゆくと、

日本・タイ協同生物調査隊(1961-2)の行動

岩田慶治,

タイ国における森林の3つの主要型の研究

(I) 森林の構造及び構成植物

小川房人, 依田恭二, 吉良竜夫, 荻野和彦, 四手

井綱英, ドンケオ・ラタナウォン, チャーン・ア  
パスト

(II) 植物の量的関係

小川房人, 依田恭二, 荻野和彦, 吉良竜夫,  
北部タイの少数民族社会の栽培植物

松岡通夫, 吉良竜夫

東南アジア採取の有蓋陸産貝類

波部忠重

タイのマングジュウダニ (I)

青木淳一

東南アジアの原尾目

今立源太良

中部タイにおける土壌内小形節足動物の季節変化

荻野和彦, パイラート・サイチュア, 今立源太  
良,

南ベトナムの蝶

井上貞信, 川副直人

東南アジアの北部地方における礼拝典儀

岩田慶治

報文の内容は、それぞれの分野において専門的の立場から批判され、検討されるであろうが、全体を通じての感想は、この第4巻が今までの報告のうちで最も充実しており、市大の調査報告の中核であるかのよう  
に思われる。その報文も第1巻においては個々の散発  
的のものが多かった観があるが、おいおいにそれが集  
約的のものとなり、そのひとつひとつが、その分野に  
おける重要文献になりつつあることが認められる。

種種困難な事情のつきまとうこのような海外の学術  
調査の実情は十分に察しられるけれども、せっかくこ  
こまで生長してきた研究グループの活動であるから、  
それをさらに発展させて、日本における東南アジア研  
究のひとつのパターンを確立されることを望むこと切  
なるものがある。調査の中核となった大阪市大関係  
者、ならびに編集者の努力に深甚の敬意を表するしだ  
いである。(吉井良三)